

4 4

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
森 哲成	男 性	7 5 歳	9 歳	中宇利

宇理国民学校 4 年生

① 8 月 1 5 日は、どこでどんなことをしていましたか。

黒石の池（中宇利）で、4、5 人で水遊びをしていた。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

快晴^{もうしよ}猛暑^{てんとうへい}の昼下がり、家のラジオで玉音放送を聞いた。天皇陛下^{てんのうへい}の声を初めて聞いたのが印象に残っている。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

戦争に負けたなんて、うそだと思って信じられなかった。学校の先生からも「日本は神の国だから必ず勝つ」と言い聞かされていた。

しかし、私の家（慈廣寺）に駐屯^{ちゆうとん}していた桜部隊の兵隊さん達は、とても喜んでた。

④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと



▲ 森さんが玉音放送を聞いたラジオ

「苦境の中での助け合い」

私が生まれたのは昭和 1 1 年で、日本の軍国主義がますます強まっていた時代だった。尋常^{じんじょう}小学校は昭和 1 6 年から国民学校となり、学校あげて国民錬成道場と化していた。私は宇理国民学校へ、わらぞうりや下駄^{げ た}をはいて通った。服装は着物に綿入れのハンテンで、先生の中には戦闘帽^{せんとうぼう}をかぶっている方もいた。

当時は、どこの家でも食糧^{しょくりょう}補充^{ほじゅう}のため、小動物（うさぎ、にわとり、やぎ、ぶたなど）を飼育していた。大型動物の牛や馬などは、農作業の道具として人間と共に家の中で暮らしていたので、自然に生き物に対する扱いや愛情は肌にしみついていた。

また、大型家畜の牛、馬は、貴重^{きちよう}な交通輸送^{しゆだん}の手段でもあった。太平洋戦争がぼっ発すると、富岡で営業していた角岩^{かくいわ}（会社の名前）のハイヤー業はなくなった。八名郡の中心地として郡役所や警察署もあった富岡でも、ガソリンが手に入らなくなったためだと思われる。当時、私は豊橋へ行くのに、中宇利から富岡の四つ辻まで徒歩で母親に連れられて行き、岡山商店でバスの切符^{きつぷ}を買い、向かいの丸本旅館^{まるほん}の柳^{やなぎ}の木の駐車場で待ったのを思い出す。道路は土道だったが、県道は常に道路工夫^{どうこう}のおじさんが、二人組で道路の維持管理^{いじ}に勤めていたし、馬車や牛車の車輪（外側が鉄製だった）で踏み固められていたので、現在のアスファルトに負けないくらいきれいだった。顔見知りでもないが、おじさんの馬車や牛車にもよく乗せてもらったことも覚えている。

○ 木炭自動車の出現

日常生活は、全て物不足に追い込まれ、代用品がいろいろ工夫された。エネルギーの元となる油などは、「松根油」*1 が考え出された。大人たちが、寺の裏山などで松の根を掘り起こし、それを絞^{しぼ}り、油を取る工場へ運んでいった。森林の木材は、家庭の炊事、風呂たきなどに使われた。若い檜^{かしの}の木は、2～3年で伐採し、海で海苔^{のり}を採る「のりしば」として大切な収入源になっていた。

そんな中で現れたのが、木炭を燃料として動く木炭自動車だった。割木^{わりき}をさらに短く切断して、それを燃やして煙を出して走る自動車である。豊橋、新城間を富岡経由で走っていたバスも木炭自動車になっていた。その木炭自動車のトラックが、冬のある風の強い日、福津の瓶割峠^{ふくづのかめわりとうげ}の手前で山火事を起こし、大事件となった。火は1日燃え続けて、西側全面を焦^こがして頂上^{ちようじよう}まで達した。目の前で広がる山火事に、恐ろしい思いをした。



▲ 慈廣寺で供出した仏具 昭和19年

○ 大空襲と疎開の人たち

戦争の影がひしひしと迫り、本土決戦の情報が流れるようになった頃のことだった。西や東の夜空に、何度か赤々と不気味な光が放たれるのが慈廣寺からも見えた。ラジオは空襲警報^{けいほう}を報じた。それが、あの悲惨な豊橋、豊川、浜松への爆撃^{ばくげき}だった。何の罪もない多くの市民が無差別に殺害されたその日だった。

戦禍^{せんか}が激しくなってくると、学童疎開^{がくどうそかい}で小学校の同級生も何人か転入してきた。私の寺の離れにも、名古屋市から縁故^{えんこ}に関係のない家族がやってきた。お寺ということもあり、縁故疎開^{えんこそかい}ができない家族でも受け入れたようだ。8畳3間の家に、「渡辺家3名」「若林家4名」「石黒家4名」の3家族が生活していた。その中の渡辺さんの息子さんは、自転車^{じてん}で新城駅まで出て、名古屋大学の医学部まで毎日通学していた。それも母と亡くなった実兄の一人娘さんの世話をしながらで、本当の苦学生だった。彼は、後に新城市民病院^{しんむつじんびやういん}に勤務し、途中で退職して市内の東新町に「渡辺内科医院」を開業し、市民の医療福祉に貢献された。

戦後、私の父母は食糧難^{しょくりようなん}に備え、500mも離れた山林を開墾^{かいこん}して、ミカン^{みかん}を50本栽培した。私たち兄弟は、急な山道を消毒用の水や、冬に備えての霜よけ用のコモをかつぎ上げる作業を手伝った。当時の子どもたちはよく働き、家族を助け、困っている家を助けることは当然のことと考えていた。自分が生きること^{こま}に必死で、つらい時代だったが、「苦しい時だからこそ助け合う」、それが当たり前のようにできる、村中が家族のように思われたよき時代でもあった。

*1 P-55-、P-56-参照。